

# 職人氣質考

## The Japanese Craftsman Spirit

山田 隆信

Takanobu YAMADA

キーワード：職人、職人氣質、徒弟制度

Key Words : Craftsman, Craftsman spirit, Apprentice system

### 1. 日本の職人

職人とは、あらためていうまでもないが、一般の労働者やサラリーマンなどとは区別され、一定の専門的な、特に手工的な技術・技能をもって、生活上必要な諸作業や諸物の製作に携わることを職業とする人のことである。ただし手先の技術による仕事に限らず、広く何であれ、自らの技能的な仕事や諸活動を天職と割り切り、誇りをもってそれに専念する人を「職人」と称することがある。最近テレビのニュース番組である財政通の政治家を「政策の職人」と呼ぶ例を見かけた。また新聞（読賣新聞二〇〇八年九月二九日）のスポーツ欄に「『職人』玉春日が引退」との見出しがあった。彼のごと

く、地道に努力し、取り口は愚直に前へ出る押し相撲一筋というような力士を、いまは相撲界から消えつつある「職人力士」と呼んでいる。あるいは日本のロケット開発に携わる実験技術にたけた科学者を「物理学の職人<sup>①</sup>」と名づける例もあった。

手に職を持つこと、職に就くことは、日本人にとって、一人前の社会人たる第一の徴であり、人生の基本ともいえるべきことであった。なかでも職人になることは、自らの技術をもって人に役立つ実用品の生産を担う、社会の重要な構成員となることであり、最も堅実で模範的な生き方の一つであった。現実にはまず生活のため、上級学校への進学をあきらめ、いやおうなく職人への道を選んだ者も

多かつたことではある。しかしながら基本的に日本社会において、職人は、日々の生活に必要な存在として、自然・風土に根ざした、健全で文化的な生活を支える存在として積極的に評価されてきた。

日本人の生活と文化の多くが、職人たちによって、職人技によって支えられてきた。常に創意工夫を怠らない職人たちは、日本人にとって、知識人や芸術家の後塵を拝するばかりではなく、いや彼ら以上に日本の生活文化の代表的担い手であったといえよう。

職人には、こつこつと地道に努力する堅実さや手先の器用さ、工夫の才を持ち合わせているが、一方華やかなパフォーマンスや自己アピールは得意ではないというようなイメージがある。日本人の多くが、そのような職人の血を受け継いでいるといわれてきた。事実長く続いてきた伝統工芸の分野においてのみならず、広く宇宙科学や情報機器、医療器具など、現代的な職業や先端技術の領域においても、その技術・技能を誇る職人たちが大いに活躍している。また例えばこれまで、子どもたちの将来希望の職業人として、「大工職人」や女子の場合「菓子職人」が上位にランクされるなど、職人への人気や憧れは根強いものがあつた。職人および職人仕事尊重の精神は、日本人に脈々と伝えられてきた。

しかし、昨今多くの業種で、職人の数の激減、および後継者難に直面している。近代以降の機械による安価な品物の大量生産によって、さらに戦後の高度成長期を経ての、よりいっそうの機械化の進展、生活形態の大きな変化の中で、職人の手仕事は、どんどん駆逐

されていった。効率性、経済性や利便性が優先され、特に自然の材料を用い手間ひまのかかる伝統的な職人仕事は減る一方である。

例えば、醤油メーカーキッコーマンの本拠があり「醤油の里」と呼ばれた千葉県野田市で醤油樽を作っている樽職人菅谷又三さん（七六歳）は、「樽では食っていないから弟子もいません。樽は容器というより木と竹による伝統的な文化だと思う。わたしの代で途絶えちまうのはもったいなくて」（産経新聞一九九七年五月二五日）と語っている。というのは、一九六五年醤油の容器が安価で大量に機械生産できるビンやプラスチックボトルに転換されたからである。最盛期には百四十軒の樽屋があり、千五百人の樽職人がいたが、取材当時職人は二人だけになっていたとい<sup>(2)</sup>う。

この例のように、ただ消えるがままにするのはもったいなくということで、あらためて文化としての意義を言い聞かせ、かろうじて細々と続けられている場合が多いのである。すでに技の絶えてしまった業種も少なくないだろう。

百年以上も続いてきたような伝統的な職人仕事は、「伝統工芸」として指定しその振興を図るなど（「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）」一九七四年施行、二〇〇八年現在二一〇品目）、政策的にも、手仕事の見直しの動きがないわけではない。「手づくり（ハンドメイド）」や「職人技」への注目や人気がなくなったわけではない。しかし現実には、機械生産が圧倒的に主である趨勢は変わらず、日本の手仕事や職人技は、全体としては衰退の一途をたどっている。切実な職人志向は若い人や子どもたちから急速になくなり

つつあるともいう。

また、例えば鼈甲細工のように、もはや材料のタイマイという海亀の甲羅は輸入できず、養殖の試みがあるとは聞くが、いまストックされている手持ちの材料を用いるしかなく、「絶滅に瀕した動物の国際取引を禁じたワシントン条約、または地球環境を守る運動が、結果として、職人たちを追いつめていることも多い<sup>(3)</sup>」のである。

当該業種の職人のみならず、必要不可欠な道具の製作や材料の生産に携わる職人についても、「職人の仕事を支える職人の道具をつくっている職人が減びつつあるんです<sup>(4)</sup>」と、そして日本の代表的な伝統工芸品である漆器についてすら、その材料となる漆に関して、「いま、山に入って漆を掻く職人の数が目にみえて減ってきているんです。職人を支える職人を大切にしないと<sup>(5)</sup>」といわれるような実情である。

このように二重三重に危ぶまれるような状況にあるだけに、職人および職人の精神のあり方について、それは職人根性、職人魂とも職人氣質とも表現されるが、それらについて、検討しておかなければならない。それらはまた実際の職人のことにとどまらず、何らかの職業や仕事を持つ人びと一般の精神的姿勢や生活信条、生き方の問題として普遍的に捉えられるべきテーマとなろう。

ことに、フリーターが増加しニートが登場するなど、ややもすれば「生きていくための姿そのものである仕事や職業という概念すら見失っている<sup>(6)</sup>」といわれるような時代、職を得ること、仕事に就くことが人生設計の根本だということがあやふやになっているような

現代だからこそ、仕事観、職業観や人生観の再構築に資するために、職人の職人たる所以について見ておきたい。

## 2. 職人氣質

職人といえば、「職人」という言葉から、何を連想するか。真つ先に出てくるのが、おそらく頑固という言葉だろう。つづいて、意地、辛抱などという言葉が浮かんでくる。そこから徒弟制度、親方、兄弟子という言葉を思いだし、のこぎりや鉋、こてなどの道具類、時代劇に登場する大工さんの絆纏や紺股引を思い浮かべる人も少なくないはずだ。腕前、腕自慢、技術なども、割合に早く浮かんでくる言葉にちがいない<sup>(7)</sup>と述べられるように、「頑固」、「意地」、「辛抱」そして「徒弟制度」、「親方」などの言葉がまず連想される。くわえて「道具」、「技術」、「腕自慢」などを含め、ここには職人に関するキーワードが勢ぞろいしているといえよう。

また職人氣質について、辞書によれば、「職人社会に特有の気質。粗野で頑固だが、実直であるというような性質」(『広辞苑』)、あるいは「妙におしゃべり(無口)であったり態度が時にがさつであったりするが、自分の技能には絶対の自信を持つ職人共通の傾向」(『新明解国語辞典』)と、ここでも「頑固」という言葉が登場し、他に「粗野」、「がさつ」、「無口」などの言葉が並んでいる。明朗、快活、闊達のような言葉が浮かんでくるというわけにはいかず、職人氣質について、どこかコミュニケーション能力不足の特徴を示したような説明になっている。気難しく尊大で偏屈、専門の方面には詳

しくともそれ以外は無知、無学で視野が狭く「世事に疎い」などの指摘もしばしば見受けられる。このようなマイナスイメージが、職人につきまとうてきたのは確かである。

ただこれらについては、脇目もふらず一心に技を磨き、仕事にうち込む「実直」さの裏返しであり、その「愚直」ぶりがやや誇張され、デフォルメされて伝えられるということではあろう。

外村吉之介は次のように述べている。

昔から落語に引出される熊公、八公は裏長屋に住む職人たちであるが、彼らが話の好材料にされるのは、ほとんど、世事に疎いということである。世事に疎いということは、職人たちが、自分の仕事に打ち込んで生きていて他事を顧みないとまがないためなのだ。本来、職業とはかかる性質を強く帯びていて、たとえば、科学者が政治に通曉していない場合があってもむしろその職責は尊いのである。職人たちが世事に疎いのは、仕事に打ち込んでいて、愚直なまでに、仕事を仕とおせようとする態度からきている。<sup>⑧</sup>

また「気が向かなければ仕事をしないとというような倨傲は、名人気質であって、職人氣質ではない<sup>⑨</sup>」ともいうように、あまりに尊大で頑固、自信過剰で傲慢なのは、本当の職人氣質ではなく、名人気取り、職人氣取りというものではあろう。ただし実際には、名人達の人の域から、一人前というわけにはいかない未熟なレベルまで、さ

まざまな職人がおり、非のうちどころのない人格者の職人ばかりではなかったであろう。例えば、「昔ア名人がいたもんだよ。どうして名人つてなア居なくなつちまつたんだい」、「昔の畳屋は、茶室だつてなんだつてやらされるんだから、ひと通りの職人はみんな茶の湯生け花の作法ぐらいいは心得ていたもんだ」（畳職人田丸恵三郎さん、一九〇三年生<sup>⑩</sup>）というように、昔の技も教養も達者な職人に比べて、今の職人の体たらくを嘆く言葉は、それこそ昔からしばしば繰り返して語られてきた。

職人社会は、伝統墨守の旧態依然の社会だというイメージがある。職人は、まさしく「頑固」に、一生同じ知識や技術体系を守ろうとする者である。彼らは、「職人の仕事なんていうものは進歩はない。進歩しちゃういけない。道具でも何でも昔からのものを使つてんのが、いちばんいい仕事ができます<sup>⑪</sup>」というように、旧套の仕方を固く踏襲しそのまま熟練に達することをもつてよしとする者であり、いわばそこで「進歩」なく立ち止まってしまふ者でもある。

「バカになって、これでもか、これでもかと塗り・研ぎ・拭きを繰り返すしかないんだよ<sup>⑫</sup>」というのは、船箆筒製作に携わる漆塗る職人（伊藤久内さん、一九二八年生）が自らの作業のあり方を語った言葉である。この言葉が象徴するように、職人は、まさしく専門バカで、専ら自己の仕事のことしか目に入らず、同じことをひたすら繰り返すしか能のない者である。代々同じ事を受け継ぎ堅守してきた職人は、それ以上の発展のない停滞的な社会でしか生きられない存在ともいえない。当然変動する現代社会においては、昔は

よかったと昔語りに懐かしく思い出すしかない存在になろうともしているのである。

しかし、技術が勝負の世界に生きる職人のなかには、実力をつければつけるほど、いっそう「創造、工夫、研究の繰り返しです」（岩谷堂筆筒、高橋清利さん、一九九八年四月四〇歳<sup>13</sup>）というように、さらに技術を磨き、新しいことに挑戦し、新境地を切り開いていくとする者のいることも確かである。「職人つてものはふしぎなもので、『いつ出来ません』ってことが言いたくない、何とか工夫したり勉強したりして、新しい材料もこなしてみたい」（瓦師新井茂作さん、一八九〇年生<sup>14</sup>）という、進取の精神の持ち主でもあった。

背景とする時代状況、経済情勢によって揺れや波はあるものの、基本的には、職人および職人氣質について、そのマイナス面を補って余りある積極的な評価がなされてきた。職人氣質について語られるところを、いくつか挙げておこう。

職人氣質とは、自分のわざは誰よりもすごいと自信をもち、仕事に関しては妥協することを許さず、お金のためというより、納得できる仕事だけをするような気質をいう。いわば、自分の製作したものに自信と責任を持つことといえよう。<sup>15</sup>

職人氣質とは、金銭よりも名誉を重んじて、自分が納得のいくまで、製品あるいは仕事に熱情をそそいで仕上げる。そういう頑固なほどに、良い仕事をしてほめられたいというのが、いわ

ゆる職人氣質である。<sup>16</sup>

「職人氣質」とは、限りなく技を磨いていこうとする勤勉で志の高い姿勢であり、一心に集中して物事に取り組む強靱な精神力であり、伝統を墨守しようとするある種の頑固さであり、それでいて新しい工夫をつけ加えることに情熱を燃やす向上心であり、先人に敬意を払う謙虚さでもある。<sup>17</sup>

職人自身の語るところを聞くと、例えば次のようである。

それに大切なのは親切気で作るってことでね。使う人のためになるよう考えてやってます。だから使う人の目につかないところでも、手が抜けないんですよ。いまの人は、これをやればいくらって、すぐお金にこだわるけど、むかしの人は品物のいいものができたらしいって、そのことだけを考えましたね。

ええ、わたしだってそうです。お金のためにやるってこと忘れて、おもしろくってやってきたんです。いまでも気に入った品物をつくりたいって考えて、仕事しているんですから。（江戸扇子職人鳥塚徳治さん、一九〇〇年生<sup>18</sup>）

そしてこのような職人の姿勢は、「すべての仕事は、職人氣質を備えてこそ、本格なものとなるのを知るべきだ。近代の機械工芸といえども」、「職人的責任をもち、需要者の信頼をうけるものでなければ

ばならない。でなければ、真の商品ではない<sup>(19)</sup>ともいうように、あらゆる仕事に通用させうるものである。職人は、「自分の腕を見込んで仕事を頼まれたら、絶対に嫌とは言えません。どんなむずかしい仕事だろうと、客に喜んでもらえる仕事をしようと一生懸命になるものなのです」(家具職人増田俊彦さん、一九三七年生)<sup>(20)</sup>とも述べられるように、自己の利益よりも、使う人のため、客の喜びのためということに心意気を発揮する者である。ここに職人の職人たる所以があった。「いいものは他人のために。いいものを商品に。これは職人たちが長い時間をかけて自分たちの存在を維持するための倫理であった<sup>(21)</sup>」。このようなあり方は、ひとり職人の倫理や生き方というにとどまらず、日本人一般にも当てはまる模範的な生き方として尊重されるべきものであろう。

いま、名人芸といわれる職人仕事は、その気質と共に後継者を見いだしにくくなっている。働く人の多くは、自前の職人よりも生活上の保証の多い、老後の安定も望める勤め人になりたがっている。そういう時代ゆえに、職人の名人芸とひたむきな熱情をもって仕事をすることは尊重されなくてはならない。金銭万能の時代であるがゆえに、金銭は、なくては困るが、たくさんあっても仕様がな、それよりも仕事だというような職人氣質は、人間の生き方の範として尊重されるべきである<sup>(22)</sup>。

「職人氣質」がわが国の文化に与えている社会的影響は計り知

れないほど大きなものがある。「こつこつ作る」「がまん強く習得する」「妥協しない」といったメンタリティは、日本人がDNAのように伝えてきたものだ。これは日本の国力の源泉ともなっている<sup>(23)</sup>。

伝統的職人が直面している問題は、まさしくわが国全体が喫緊の課題としているものの縮図である。病気は最も純粋な部分から顕在化するからだ。現場の状況を聞くと、単に人手の問題と  
いう以上に悲惨なことになってきている。我慢強さ、工夫する喜び、向上心といった、職人に必須である資質が、若い世代からは年を追うごとに失われていつている。これもまた、日本社会のあらゆるところで進行している問題である<sup>(24)</sup>。

多くの論者のいうように、職人氣質の変質、衰退、職人仕事の消滅の危機は、職人社会にとどまらず、日本人および日本社会にとつても、「大袈裟にいえば、ああいふ気質こそ日本の倫理的な柱だったのではなかったか。あれがなくなったら日本という国が崩れてしま<sup>(25)</sup>う程の」大きな危機と捉えられてしかるべきである。そしてその危機は深く確実に進行しているところである。いずれ日本人の中から職人の「血」も「DNA」も失い果てることになるのであろうか。

### 3. 徒弟制度

職人および職人氣質は、これまでどのように養成され、形作られ

てきたのだろうか。いわゆる「徒弟制度」の中で、親方、師匠から弟子へ、個人から個人へ、職人技とそれを支える精神、生活態度の伝承が図られてきた。職人仕事衰退の趨勢にある現代において、徒弟制度はなお維持することが、あるいは発展的に改変することができるのであろうか。

徒弟制度について述べられるところを見てみよう。

職人氣質の醸成は、徒弟制度の中では親方と私生活を共にする濃密な関係の中で養われた。弟子は、親方の生活態度、仕事への情熱、製品に対する責任、絶え間ないわざの工夫を間近に見る中で、職人としての倫理、心構え、生活態度を身に付ける。いわば、親方の背中を見て自ら覚える。徒弟制度では、内弟子が当たり前であったので、親方と生活を共にする中で職人氣質あるいは職人根性を自然と身に付けていった。会話やことばだけでは職人氣質は教えられない<sup>(26)</sup>。

徒弟制度の基本は、教わりたい弟子が師のところまで技を見て覚えることにある。覚えたものだけが次の工程に進むことができる。師の教え方は単純である。そばに置いてやって見せることと、間違ったときに叱ることである。職人の師匠は弟子をほめることはない。……弟子は叱られて育つ。教育の専門家ではない職人が自分の持っている技を弟子に植え付けるには基本的に叱ることしかない。弟子には理不尽に思えることであらうが、

師は先生ではない。教えなくてはならない義務はないのである。預かったからには一人前の職人に仕上げたいと思うが、それはすべて弟子次第なのである<sup>(27)</sup>。

徒弟制度の中の職人育成のあり方は、「基本的に職人の世界は『身体で覚える』世界であり、試験勉強のように知識を詰め込めばいいというものではない。そのため教科書のようなものは存在しなかった<sup>(28)</sup>」ともいうように、共通の学習プログラムやカリキュラム、教科書が用意されているのではなく、それぞれ体験的に学習し身につけるといえるのである。親方や師匠、また先輩から「会話やことば」で懇切丁寧に教えられるというのではなかった。

職人たちからの聞き書きを見れば、「昔の職人は、仕事のコツをなかなかひとに見せなかった」(大工職人木所仙太郎、一八九〇年生<sup>(29)</sup>)や、「こいつを知らねえと職人として一本立ちは出来ねえんだが、親方はなかなか教えやしねえ。……辛い年季をおっぼり出してズラかつちまう心配があるからってわけなんだ」(前出田丸さん<sup>(30)</sup>)など、あるいは、ある親方は弟子の作った品物を「だめや」というなり壊してしまい、「どこが悪いとは一言も言わない」(太鼓職人浅野義幸さん、一九九八年当時五三歳<sup>(31)</sup>)というような事例には事欠かない。なかには、靴下職人から玉子焼き職人に転身した高山藤三さん(一九三七年生)の場合、靴下作りについては、「今はそんなことないでしょうが、あの頃の職人といったらみんな根性が狭くてね。誰も仕事を教えてくれないし、機械も触らしてもらえないんですよ。だから、

ちよつと一日、二日練習すれば、できることを半年くらいやらしてもらえない。……一年でできるものが、五年かかった」と、また玉子焼きについても、「それが、ほとんど教えてくれない。玉子焼きを作らせてもくれない。……もつぱら玉子を割ったり、包装や配達したり、雑用ばかり。職人さんたちは自分の仕事を奪われるのがいやだったんでしよう。ついにそこで仕事してた二年間、会社じゃ玉子焼き作らせてくれませんでしたね」というような例もある<sup>32)</sup>。

親方、先輩、兄弟子だれも手にとって仕事を教えてくれるわけではない。つまり「親方や先輩の仕事をそばで見ながら、ひとりですんでいく。てつとりばやくいえば、親方や先輩の技術を盗むようにして自分のものにするわけである」(鼈甲細工磯貝庫太さん、一九一四年生)<sup>33)</sup>。

安田武は次のように述べている。

職人・芸人の世界に「盗む」という言葉がある。技は、教えて貰うものではない。その道その道で、師匠や兄弟子から盗むものだ、というのである。事実、むかしの師匠や親方は、何も教えてくれなかった。だから「盗む」より仕方ない。盗まなければ、金輪際、一人前にはなれないのだ。そこに被教育者の自覚と自発性が生きていた。ここから、腕にたたきこんだというあの職人たちの自負も生まれた。昨今の学校教育は、まさにこの正反対の道を進みながら、「教育」の名を独占し万能化している。伝統芸の質の低下あるいは消滅は、このような風潮に原

因している<sup>34)</sup>。

昨今の学校教育の功罪についてはいま措くとして、「ひとりです」び「自分のものにする」覚悟、「被教育者の自覚と自発性」こそが一人前の職人となるにあたっての要点である。技以前にこのような自発的な志や覚悟こそが鍛えられ培われていなければならない。さらに職人自身の語るところを見てみよう。

技ちゅうのは、口ではいわれんことが多いからのう。師匠もつい手も出る。習うよりは教えるのほうが難しいですな。言葉にならんとこがあつての、どうしても。それはやって覚え、仕事をして、仕事から習えちゅうことになるわけです。(竹細工廣島一夫さん、一九一五年生)<sup>35)</sup>

職人というのは、体で仕事をおぼえるんです。だからわたしなんか、なぜそうなるのかって聞かれても、まるつきり話せませんよ。いまのようにまず理屈があつて、こうしてこうすれば、こうなるっていう筋道がない。失敗してゲンコツを食らつて、痛い思いをしたぶんだけおぼえていくんですね。だからたいへんな修業ですよ。いまの若い人たちから見れば、不思議に思うでしょうけどね。でもね体でおぼえるから理論じゃわからないうか、コツというか、職人の腕ということになるんですよ。(組



紐職人深井理一さん、一九二五年生<sup>(36)</sup>

小僧は虫けら同然。親方の子どもの世話やおつかいなど、すべてをやらなくてはいけない。……いまでも思い出すと涙が出ますが、おかげでたいいのことは我慢できますね。昨今の若い人はイヤなことがあるとすぐに辞めてしまう。もったいないですね。好きだと思っても嫌いになる時は必ずあるんですよ。『石の上にも三年』で、その魅力に気づく時が来るんです。原点に戻ってみると先は開けます。……親方も小泉さんに対して脅威を感じていたようだ。いいものをつくるほど冷たい目でみられた、と小泉さんは当時を振り返る。結局十六年間親方のもとで修行した。……先日、小泉さんは親方と会った。親方は小泉さんにこう言った。清ちゃん、お前ほどやれるヤツはいないよ。当時は冷たくされたし、実はいろいろなところからずいぶん誘われていたんです。でもなんだか裏切るような気がして、親方のところへ十六年もずるずると残っていたんです。あの一言で、すべて報われた気がしましたね。(鏝師小泉清三さん、一九三八年生<sup>(37)</sup>)

厳しくも深い愛情をもって熱心に指導にあたる師匠がいなかったわけではないであろう。平成の現在の例だが、「師弟関係を結ぶことは親子になること。生きる術を先人から学ぶことです。私は多くの方たちの指導を受けました。この幸せを多くの方に分け与えたい」

と熱心な指導ぶりを語るのは、文化財の修復に携わる表具師職人山内啓左さん(一九九七年当時六〇歳)である。ここでは新人は三年間「住み込み、食事もしつしよにとる」徒弟制度を守っている。「大で遊びを覚えたら職人はつとまらない」と、希望者には仕事をしながら夜間大学に通わせるというような仕方である。そこでは珍しくといわなければならないが、「弟子入り志望の若者は引きも切らない」という<sup>(38)</sup>。

あるいは和裁士小杉亘さん(一九四〇年生)の場合、「オヤジが師匠。他人のメシを食ってない。しかも、普通、職人というと『見て盗め』なんて放りっぱなしにされるでしょ。でもウチのオヤジは違う。『見てわからないものは、口で教えればいい』って主義で、ひとつひとつキチンと教えてくれました<sup>(39)</sup>」とのことである。

戦前の例では、師匠が実の親だとしても、大工職人味方寅治さん(一九〇〇年生)の場合、「わが家で修業したとは言いながら、そのしつけの厳しいことは、『寅さんは継っこじゃねえか』なんて言われたぐらいのもんで……首をくくりたくなるような叱言を言われたもんだ<sup>(40)</sup>」というように甘やかされるわけではなかった。

さまざまな場合があり一様ではないが、現在に至るまでおおむね親方、師匠は必ずしも心優しい教育者ではなかった。多くの弟子は、一人前になるまで、まさしく人間扱いされないところを我慢して修業したのである。「親方と弟子というのは親分と子分みたいなもの。それはもう、非人間的に鍛えあげられてくる。その中から、負けるものかというわけで、いい仕事ができてるんですが<sup>(41)</sup>」と、厳しさ

を我慢し苦勞を乗り越えてこそ弟子は育ってくるという。やさしく甘やかされた弟子は大きく成長しないともいう。師弟間に和氣藹々としたやさしい教育的雰囲気があったとしても、それは弟子をスポイルすることになるかも知れず、必ずしも弟子の大成に結びつくとは限らない。

親方の多くは愛情あふれる親でも先生でもない。親方はもともと先生を志したわけではない。「職人の師匠は弟子を一人前に仕上げていくが、それは商売敵を作る作業でもある。弟子にしても一番のライバルは師匠である」と述べられるように、弟子は実力をつければつけるほど、実際には師匠にとって、「脅威」さえ感じさせるライバルとなり、商売敵ともなる存在なのである。上記の小泉さんのように「いいものをつくるほど冷たい目でみられた」というのは、決して例外というわけではなかった。しかし恨みつらみだけが残るというのではない。厳しく非情な師弟関係であったとしても、技術や職人的生き方の伝承があるところ、そこに、「お前ほどやれるヤツはいないよ」、「あの一言で、すべて報われた気がしました」と、師弟が互いに認め合い、通じ合う信頼関係がまったくなくないというわけではないだろう。

しかしながらこのような師弟関係は当然外国人に対しては通用しない。イギリスから、漆塗りに魅せられ日本にきて輪島塗師となったスーザン・ロスさん（一九六二年生）は、次のように述懐する。

研修時代、どうしても理解できないことがあった。日本独自の

徒弟制度だ。「仕事は盗むもの」という教えも不思議だった。

……いくら質問しても教えてくれない先生もいた。黙れ！見てなさい！バカ野郎！と怒鳴られたことも。イギリスでは考えられないこと。遠い輪島まで勉強に来たのに……ここは学校でしょう？学ぶためにきているのに、なぜ教えてくれないの……と何度も先生に噛みついて、喧嘩して泣いたこともあった。<sup>(43)</sup>

外国人以上に、現代の若者には通じないであろう。それに「労働基準法というのは徒弟制度を認めませんからね。修業中の弟子にも月給を払えというんですよ。月給払って働いてもらうんじゃありません。仕事を身につけて一本立ちしてもらいますから、払うどころか、もらいたいくらいですよ。もう職人の世界で、弟子は取れない時代になりました」と、ある親方のいうように、もはや旧来の徒弟制度をそのまま維持することはできない。新たな師弟関係を模索しなければならぬ。しかしどのような関係であれ、つまるところ「弟子次第」、「被教育者」の志次第ということは変わらないのではないだろうか。

人は、特に日本人の多くはと言いたいだが、利益を上げて金持ちになろう、今を楽しく生きようというばかりではなく、苦勞に耐え我慢し辛抱しても、それぞれの夢を実現しよう、それぞれの道を極めようとする者である。人は多く、それぞれの分野で名人達人の域に達しよう、世のため人のため何事かを成し遂げようという高く強固な志を持つ者である。どのような仕事であれ、このことこそが根本

になければならぬであろう。奥山清行によれば、日本人はどの国の人よりもこのような高い志を持つ者だという。

日本人は個々の「志」が非常に高い民族であるとも言える。私が暮らして仕事をしてきた国の中で、これほど一人ひとりの志が高い民族はいなかった。……希望や願望が、志というレベルに到達するまでには、自己鍛錬が必要だ。切り捨てるべきところは潔く切り捨てて志に邁進する姿勢を、日本人は求道者ならぬ普通の人が持っている。その点で、「高い志」は日本に受け継がれてきた文化だと感じる。日本には伝統的に、そうした精神風土があった。人々の生きる姿勢に染みついた生活哲学があった。職人の技も、その土台の上に成り立っている。だから日本から生み出された「もの」は、世界でも独特の「もの」であり得たのだ。<sup>(45)</sup>

自己の希望や志は、我慢と辛抱を重ねさまざまな試練や苦勞を乗り越えてこそ、確固としたものとなり、さらに目標に向かって邁進することを支えてくれるのである。日本において、経済的な事情に応じて、職を確保しつつ、自己の志を鍛え固めるに適当な制度として、徒弟制度があった。

何らかの仕事をなすにあたって、まずは自己鍛錬あるいは自己犠牲をも厭わない「高い志」、そして人のため、客の喜ぶ顔を見るためという他人への想像力と思いやり、仕事の出来栄え、製品の魅力や

美へのセンスが重要である。日本の伝統的な精神風土はこれらにマッチするものであった。これらがあれば、さらにこれらを何らかの修養、修業や工夫によってより確実なものにすることができれば、必ずしも昔ながらの徒弟制度に固執する必要はない。

今後の課題ということになるが、近代的な学校制度は、徒弟制度以上に、日本人の高い志や技を鍛え、他人への思いやりや健全な美のセンスを引出すことに成功しているのだろうか。やはり何がしか旧態に復さなければならぬのであろうか。

### 【注】

- (1) 石山修武『現代の職人』（晶文社 一九九二年二月）三四七頁
- (2) (文) 小田孝治(写真) 三好英輔『日本の「技」』（メトロポリタン出版 二〇〇〇年十二月）八四頁
- (3) 永六輔『職人』（岩波新書 一九九六年一〇月）三〇頁
- (4) 同上
- (5) 同上 二〇頁
- (6) 塩野米松『失われた手仕事の思想』（中公文庫 二〇〇八年三月）二八六頁
- (7) 北原亜以子『銀座の職人さん』（文春文庫 二〇〇〇年十一月）十九頁
- (8) 外村吉之介『民芸遍歴』（朝日新聞社 一九六九年十一月）九三頁
- (9) 同上 九八頁
- (10) 斎藤隆介『職人衆昔ばなし』（文春文庫 一九七九年八月）一〇七頁
- (11) 永前掲書 二五頁
- (12) 『世界のロングセラー 3』（小学館 一九九六年六月）六七頁

- (13) 讀賣新聞夕刊 一九九八年四月二十五日「クローズアップにつぼん―岩手県―」
- (14) 齋藤前掲書 一三一～一三三頁
- (15) 林部敬吉・雨宮正彦『伝統工芸の「わざ」の伝承』（酒井書店 二〇〇七年三月）
- (16) 中村雄昂『現代の匠』（角川選書 一九八六年六月）八頁（現代と職人）加太（こうじ）
- (17) 北康利『匠の国日本』（PHP新書 二〇〇八年一月）七〇頁
- (18) 中江克己『江戸の職人』（中公文庫 一九九八年一月）一一八頁
- (19) 外村前掲書 一〇〇頁
- (20) 増田俊彦『木のこころ 職人の技』（ゴマブックス 一九九九年一月）三四頁
- (21) 塩野前掲書 二六一頁
- (22) 中村前掲書 九頁
- (23) 北前掲書 七〇頁
- (24) 同上 二一五頁
- (25) 中野孝次『光るカンナ屑』（小学館 一九九六年六月）七四頁
- (26) 林部他前掲書 一三〇頁
- (27) 塩野前掲書 二五七～二五八頁
- (28) 北前掲書 七七頁
- (29) 齋藤前掲書 三二頁
- (30) 同上 一一四頁
- (31) 小田前掲書 一二九頁
- (32) 山中伊知郎『職人になる！』（明日香出版社 一九九七年十一月）一三六～一三七頁
- (33) 中江前掲書 一九～二〇頁
- (34) 安田武『芸と美の伝承』（朝文社 一九九三年十二月）九〇頁
- (35) 塩野米松『手業に学べ 月の巻』（小学館 二〇〇〇年十一月）二〇四頁
- (36) 中江前掲書 八五頁
- (37) 『学校で教えない職人の仕事』（株）エディト編 竹村出版 一九九九年五月）五二～五三頁
- (38) 小田前掲書 三二頁
- (39) 山中前掲書 五七頁
- (40) 齋藤前掲書 一五頁
- (41) 永前掲書 三八～三九頁
- (42) 塩野前掲書『失われた手仕事の思想』 二二五頁
- (43) 井上和博『日本を継ぐ異邦人』（中央公論社 一九九八年一〇月）五八頁
- (44) 永前掲書 三九頁
- (45) 奥山清行『伝統の逆襲』（詳伝社 二〇〇七年八月）一一九～一二〇頁

**Abstract**

Japanese craftsman's ethical way of life and craftsman spirit should be evaluated highly as well as their superior skill of the manufacturing. It is a moral obligation of the craftsman to make an effort to do good work for a customer. The skill and the mind of the craftsman were trained in the apprentice system. However the apprentice system cannot be maintained same as old times at the present period. Apprentice's high will and initiative are necessary in any kind of education system.